

- 1、上地古窯跡群の再調査を継続し、その内容を学区の皆さんにお知らせしていく。その際、堤ヶ入古墳と上地向山古墳についても調査の対象とする。
- 2、上地古窯跡群や古墳については、当面は現状のままの保存をし、関係方面に「破壊につながらない」発掘調査を働きかけていく。
- 3、岡崎市公園緑地課を初め埋蔵文化財保護に関する諸機関に、文化財の存在と歴史的な意義を示す看板表示の設置を働きかけていく。
- 4、窯のミニチュアによる再現や灰釉陶器づくりなど、学校や地域で、できることを手がけていく。
- 5、その他、上地学区の埋蔵文化財保護のための諸活動を推進していく。

短い紙面で、多くの内容にふれたため、読者の皆様にご迷惑をおかけしたと思います。皆様と共に今後の研究成果を改めてご紹介する機会をもてたらと念じつつ……。



## 二、校長通信

## 桜と花水木に迎えられて

学区づくり、学校づくりに燃えている上地小学校に赴任できたことを嬉しく思います。

四月一日、校門を入ると左に、学区・学校創立十周年記念の「ふる里上地」の石彫が目に入ります。子供二人の楽しい語らいがきこえてきそうです。足元にも、この会話の仲間に入っているかのように、左に二人、右に一人配置されています。なかなか雰囲気です。

玄関前の樹木園に桜が一本、春だよ、と元気よく咲きほこっています。玄関には「ありがとう、すなおに言える子、上地っ子」の立て看板があります。看板の下部に上地小学校PTAと記してあります。PTAの協力を感じました。

四月二日、全職員に迎えられ、赴任の挨拶をしました。その中で三つのことを大切にしていきたいと述べました。

上地小学校のすばらしさは、各方面から耳にしています。早くそのすばらしさ理解して、それを生かしていきたい。

一、子供たちの自主性を育てる。そのため体験性豊かな授業を展開すること。

二、私たち教師は、たえず研修をし、教師一人ひとりの個性・創造性を発揮すること。

三、学区・家庭の皆さんと常に情報交換をし、理解と信頼を深めること。

本年度は、新学習指導要領の完全実施の年、子供たちの感性、意欲、個性を大切にして取り組みたい。

二週間後、桜は葉桜になりましたが、体育館前の花木（ハナミズキ）六本が薄紅色で見事に咲いています。何とも言えない品のある美しさです。

玄関へ通じる一本の通りをはさんで桜と花木が南北に向かい合って春を味わわせてくれます。二週間という短い時間の経過とともに自然の妙を描き出しています。桜といえば、明治の終わりにワシントンへ送った桜を思い出します。また、花木は、桜の返礼として送られたアメリカの国花であります。この緑の深い両木が、ここにあるのです。先輩の先生方、学区の皆さんの知恵とご努力に深い感銘をおぼえました。さっそく、このことを月曜集会でお話しました。

上地小学校で頑張っていること、自慢できることは何ですか、と子供一〇〇名に尋ねました。みんな元気にすぐ答えてくれます。そのベストテンは、次のようになりました。

- |   |                       |    |                  |
|---|-----------------------|----|------------------|
| 1 | みんな明るいあいさつがしっかりできる。   | 6  | レインボータワーがある。     |
| 2 | みんな力を合わせてがんばる。        | 7  | 十周年記念の像がある。      |
| 3 | 運動でがんばっている。特にバレーが強い。  | 8  | 学校が大きく、友達が多い。    |
| 4 | 動物がいる。ふれあい牧場がある。花がきれい | 9  | 各クラスに、ビデオデッキがある。 |
| 5 | みんなやさしくて助け合っている。      | 10 | 先生が明るい。          |

子供たち自身に、自慢できることがいくつか出てきて嬉しい限りです。子供に学びつつ、子供を指導していきます。

## 学校が大切にしていること

### 全職員で子どもを育てる

誰も、自分の夢や希望を持っています。こうなりたい、こうしたいという願いがあります。上地小学校は、子どもたちが将来一社会人としてたくましく生きていくため、こうしてほしいという子どもに寄せる期待があります。

開校十年目を迎えて、全職員一丸となって学校づくりに励み、子どもたちに豊かな心を育てていきたい。その第一歩は、どの子にとっても学校が楽しいところになることだと考えます。次が、本校の教育目標です。

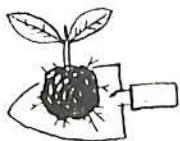
### 心豊かに力いっぱいやる子の育成

- ア. 創意工夫し、意欲的に学習する子
- イ. 愛情にあふれ、心をこめて実践する子
- ウ. 活気に満ち、自律的に行動する子

期待する子ども像を目標にして、職員が協働の精神を持ち研修していきます。また、PTA、学区諸団体と連携を深めていきます。本年度の重点として、①子どもを生かす環境構成に努める。②学級づくりを基盤とした学習指導を推進する。③読書の習慣を身につけ豊かな心、学習の仕方を培う。④地域教材の発掘と郷土読本「わたしたちの町うえじ」の活用を進め学区の理解をはかる等を進めていきます。これらが子どもたちの主体的な体験の中で育つよう努力を払っていきます。

### 学級で子供を育てる

子供を育てる一番の基盤は学級にあります。担任の子どもを思う心は測り知れないものがあります。心を合わせてすばらしい学級にしようと、年度の初めに子どもと話し合い、学級の目標（ねらい）を考えます。ここに、全学級の目標（ねらい）を紹介します。



一の一・すくすく	一の一・げんき	一の三・あかるく	一の四・えがお	一の五・げんき
二の一・元氣	二の二・ファイト	二の三・さいごまでやりぬく	二の四・なんでも一番	
三の一・思いやり	三の二・明るい子	三の三・思いやり	三の四・おもいやり	三の五・元氣いっぱい
四の一・思いっきり	四の二・助け合い	四の三・平和	四の四・勇氣	
五の一・友情	五の二・優	五の三・心ひとつ	五の四・努力	五の五・雑草
六の一・気合一発	六の二・煌めいて	六の三・絆	六の四・闘志	六の五・心友

お母さんやお父さんは、子どもの学級のねらいについて御存じでしたでしょうか。子どもたちの気持ちや考えを知りつつ、家庭での教育を進めてほしいと願っています。学級という共通なねらい以外に、一人ひとりの子どもには、自分の希望や夢があります。その希望や夢について学校でも家庭でも語り合っていきたいと考えています。

今、家庭で大切にしていることは

少し前、妹の明るさをねたんで、姉が妹を刺すという事件がありました。同じように育てていても姉妹では性格や行動が見方、考え方が異なっています。それぞれの子どもの思いに無関心でいると、大変なことが起きると、私たちに教えているのです。このことは、姉妹兄弟だけでなく師弟親子の関係でも言えます。人間それぞれ、苦しみや楽しみが異なっていますが、根本のところ深い信頼がほしいものです。この信頼は、会話やあいさつのことばによって通じることもありませんが、共に行動する中で自然に生まれてくるのではないのでしょうか。表現力のない子にもっと上手に言いなさいと叱ったり、元氣のない子にもっと明るく振る舞いなさい、テストの点が悪い時に、もっと点数を取りなさいなどの注意をするだけでは育てる上でどうでしょう。やろうとする意欲、心からそう思える、じわじわと湧き出てくるような心の変化は、共に何かを作る、栽培する、スポーツをする、家の手伝いをする、学区を歩く、料理作りをするなど、体験の中で語り合っこそ、培われると思います。

## よく見て 触れて そして 仲よく

### ザリガニ取り

二年生の子どもたちは、郷土読本「うえじ」で柳川の生き物について勉強しました。ザリガニや小さな魚がいそうなので、さっそく、ザリガニ取りに出かけました。

あみ、バケツを持ち、ぞうりをはいて元氣に出発します。

「先生、早く入りたいよ。」

「どこに何がいそうか、すみかのようすを見てからね。」

「先生、こんなに取れたよ。見て、見て。」

数匹のタナゴをやモロコをとった子、一人で数匹のザリガニをつかまえた子、全々取れなくて困っている子さまざまです。

二年生全員にザリガニ取りを経験させたいが、これでは、柳川の生き物が一度にぐーんと減ってしまわないかと二年生の担任が心配するくらい子どもたちは夢中になっています。

このあと、ザリガニに触れたり飼うためのすみかと食べ物話し合ったり、またザリガニにお礼の手紙を書いたりします。そして、やがて元のすみかへ放すなど一連の学習が進みます。

今年から、低学年では、理科と社会科にかわって生活科の学習が導入されました。生活科のねらいは、まず子どもたちに体験させることを第一とし、その体験を通して、最終的には自立の基礎を養うことです。対象が自然の場合は、生き物と親しくなり、生き物の命を大切にしておくことです。自然が少なくなっている現在ですが、まだまだ上地には数多くの自然が残されており、子どもたちにとって幸せなことであります。



## ひな育て作戦

体長二十センチのにわたりのひなと遊んでいる子どもたちがいます。三年二組の子どもたちです。放課になると、とび出して来ます。教室のダンボールの中では、運動不足になると心配してのことです。このひなの名前は「ピピ」と言います。

「ぼくんちに一匹だけにいるより、学校に行けば仲間がたくさんいるからいいと思いました。慣れるまで、まず学級で育てたい。」と飼い主のO君が言います。

そこで、ひな育て作戦がはじまりました。まず、鳥小屋がいります。校務員の岩瀬さんが好意で作ってくれました。

「ピピって、生きているのだから、気持ちよく生活したいよね。」

一人の声にみんなが賛成、やることと係の人が決まりました。新聞紙を取り替えたり、えさと水をやったり、「ピピちゃん三の二へようこそ日記」書くなど、毎日二、三人の係でがんばっています。

「ピピって、アリアムカデも食べちゃうよ。」「新聞とか取り替えるとき、あばれるから大変だよ。」「チョウウと仲よくなるかな。」係の中心となったMちゃんも世話係になってからは、とても元気になり、みんなが一段と協力的になってきました。担任の寺澤先生も「友達どうし、認め合ったり、励まし合ったりで子どもたち一人ひとりにとって、ピピの存在はプラスになっています。」と話しています。生き物の世話は、簡単ではないがひとつの価値ある体験です。

少し前、上地八幡宮を散策していた時のことです。二人の子が、池の近くの道路脇で、地面にはいつくばって夢中で何やらやっています。よく見ると、穴に糸を垂らして、しきりに穴をのぞいています。近づいて声をかけてみました。ザリガニつりをしているところでした。

「二匹は釣れたけど、あとなかなか釣れないです。」

「ザリガニは見えるんだけど。」

「糸をゆっくり動かしたらどうかかな。」

そのうちに数匹のザリガニが釣れました。子どもたちのこうした熱中する姿を見ると嬉しくなります。

## チョウウの知恵

上地小学校の子どもたちの人気者チョウウは夕方になるときまって中庭にあるレインボータワーにいます。それも塔の中段のリングに止まっています。夕方、校内を見回っている時気づくのだが、ほぼ同じ位置にいます。五時三十分ぐらいになると、どこからともなく、中庭に現れます。部活動の帰りぎわ、五年生の子どもたちが話し合っていました。

「チョウウって、タワーの高いところにいるけど、どうしてかな。」

「チャボは、牧場の小屋に入るけどね……。」

「雨の日だとチョウウも小屋にいるよ。」

「レインボータワーなら安全だからだよ。」

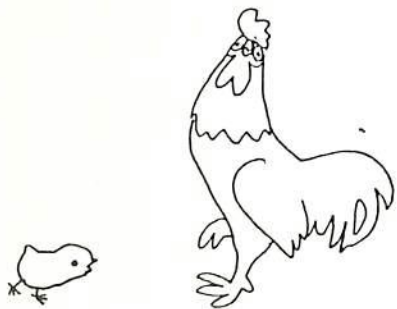
「ここなら、気持ちがいいし。」

「でも、どうやってあそこにかかるのかな。」

私も、どのようにしてタワーの中段に上るのか不思議でした。

次の日、みんなでチョウウが上るところを見ることができました。さて、翌日の五時四十分、チョウウが中庭に現れました。

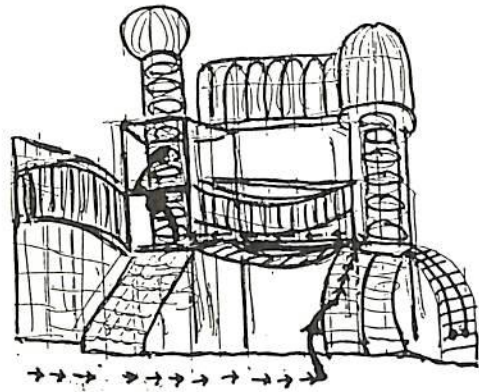
レインボータワーに、一人でも子どもがいると、まわれ右して戻ってしまいます。しばらくして、再びチョウウが



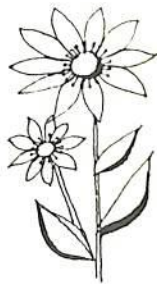
姿を見せました。

さて、どうするか。

下の図の矢印にそって、チョウローは、タワーに上っていき  
ました。↑は一步ずつの前進です。↓はジャンプしたところで  
す。まったく、無理のない上がり方です。みんな、感心してい  
ました。



### 子供の生活を語る



学校においても家庭においても 子供たちに価値ある体験を と考えています。一つは人間としての五感を十分発揮してほ  
しいことであり、もう一つは人としての優しさ、勇気、たくましさを培っていきたくらいと思っているからです。

今月は、PTAサークル活動の一つであります「子供の生活を語る会」のメンバーお二人に、主に家庭生活における体験に  
ついて語っていただきました。夏休みに入っている現在、各家庭の問題として主体的に考えていただけると幸せです。

#### あお虫の思い出

先日、庭先で、子供たちはカブト虫の世話をし、私は花の手入れをしていました。そのとき、バセリにあお虫がついている  
のを見つけました。「いい機会、子供たちに見せてやろう」とバセリごと切り取って目の前に差し出したところ、「キヤー」  
と悲鳴を上げました。私は、カブト虫とたいして変わらないのに、と思いながら「おもしろい足をしているよ」と話をしまし  
たがあまり関心を示しません。

そのとき、下の子が「お母さん、それどうするの、ふんじょうの」と言うのです。私は、そのときドキッとしたのです。  
というのは、昨年のこと、あお虫もかわいいと毎日見ていたところ、どんどん増えて、大きくなるにつれて、バセリは丸坊主  
そして、お花が咲くのを楽しみにしていたくちなしの花も食いつぶされてしまい、私はあお虫に腹を立て踏みつぶしてしまっ  
たことがあるのです。一年前のその時のことを子供がいまだに覚えていたのです。一方で、死ぬとかわいそうだからといって  
は昆虫や金魚の世話を子供たちにさせていながら、一方では生活に不都合ということから、あお虫を殺し、何とそれだけの  
ことをしているのだろうと、子供の何気ない一言で考えさせられました。

おたまじゃくしがかえるになるまで

六月の初め頃、三年生の長男は学校から帰ってくると、近所の友達と外に出かけ、二時間ほどたって上機嫌で帰ってきました。「ただ今、大谷公園の近くの田んぼでおたまじゃくし見つけたよ。」とにこにこしながら言いました。「何匹くらいいるのかな」などと言いながら、私は内心「これは困ったな。」と思いました。というのは、実は、私は生き物を飼ったりするのが苦手なのです。でも、親として、そういうことを言うわけにはいかないと思いましたから「すごいね、よく見つけたね」と言って、一応歓迎しました。

さて、そのおたまじゃくしですが、子供は「つかまえた所と同じような場所を作ってやるんだ。」と言い、水槽に水を入れ土を入れ、田んぼの水のように、にごった水にし、小さな石や草などを入れて、なかなか住みよさそうにでき上がりました。

二、三日すると、もう後ろ足が出て、やがて前足も出て、小さなカエルになりました。「カエルになったよ。」長男は大喜びでした。私は「このおたまじゃくし全部カエルになるのか気持ち悪いなあ。」と思いながら、「カエルになったね」と平気な顔をして一緒に喜びました。

そうして、いく日かたつて、カエルの数もずいぶん増してきたころ、カエルが水槽の天井に何匹かびったりくっついてじっとしているの気がつきました。「どうしてかなあ。」と言いながら、不思議に思っていたら、そのうちに、水の中に落ち死んでいるのが見つかりました。お父さんが、「大きな石でも入れて、カエルが水から出られるようにしてやらなければ死んでしまうよ。」と長男に言っていました。「えー。そうだったの。」さっそく水から半分くらい出る石をさがして入れてやりました。しばらくすると、ようやく安住の地を見つけたカエルは、さっそく石の上に移ってきました。

六月もそろそろ終わりに近いころ、長男が「カエル、やっぱりもいた場所にかえしてやろうか。」と言い、私も「そうしよう。」と言って、「今度飼うときは、もっときちんとやろうね。」と言って、田んぼに返しにいきました。(N・S)

## この秋充実の日々を



・九月一日はどの子も日焼けした元気な顔を見せてくれました。

・八月二十二日の学区親子夏祭り、三千人の学区民の参加があり、上地学区のパワーに感動しました。

・秋は子どもにとって、成長・充実の季節。スポーツ・読書・文化に「力いっぱい」を期待しています。

それぞれの学校休業日(学校週五日制のアンケートより)

九月十二日は、学校週五日制の第一段階としての最初の休業日でした。子どもたちはどのように過ごしたでしょうか。アンケート調査の一部をお知らせします。(二年一五一名、五年一七五名の調査です。)

一、あなたは、九月十二日の休業日の午前中、主に誰と過ごしましたか。

①ひとりで(二年九名、五年十名) ②友だちと(二八名、四六名) ③家庭で(百九名、九八名)

二、何をして過ごしましたか。

①家の近くで遊ぶ(七一、七二) ②家でゆったり(二五、三四) ③家の手伝い(二五、二六) ④買い物(二二、二八)

⑤読書や勉強(二二、二十) ⑥旅行・ドライブ(一三、二五) ⑦けいこ事(八、八)

⑧地域の行事や子ども会に参加(一七、八)

子どもたちが、自分の考えで、目的を持って生活したり、家族と一緒に目的を持った活動ができればと願っています。それぞれの家庭で十分話し合って進めていただけたら幸いです。

・親の生き生きした姿を

市民陸上とスポーツ少年団の快挙

九月二十日、県営グラウンドで市民陸上大会が開催され、小学校部門で、すばらしい成績を収めました。また、ソフトボール少年団は、協会の大会で準優勝。バレーは、新チームによる六人制の大会で男子は優勝、女子は準優勝という好成績をおさめました。

四〇〇メートルリレー男子	優勝
四〇〇メートルリレー女子	優勝
走り幅跳び	男子 優勝

走り高跳び	男子 二位
一〇〇メートル	女子 二位



宇宙飛行士毛利さんに学ぶ

嬉しいことがもう一つあります。毛利さんに乗せたスペースシャトル・エンデバーが無事着陸したことです。

船内での数々の実験は、人類の宇宙進出への貴重なものであります。船内の七人の協力も立派ですし、それを支える何百、何千人の科学者や関係者とのチームワークは見事でした。

それにしても、毛利さんの笑顔は何とも言えない喜びで満ちあふれています。真理を探究する喜びでしょうか。

月曜集会で、エンデバーの無重力状態について、簡単な実験を加えながらお話ししました。子どもたちは真剣な顔で耳を傾けてくれました。どの家庭も、きっと話題にのぼり、宇宙への夢を語り合ったことでしょう。

学区・学校づくり十年に感謝



学校を訪れる方が決まって言われる言葉に「上地小学校の子どもさんは、明るく元気に挨拶ができますね。」「学校の雰囲気がいいですね。」があります。そのたびに大変嬉しい気持ちになります。創立して十年目、学区の皆さん、保護者のみなさん、関係者の皆さんのご尽力によって現在の上地小学校ができているのだという印象を強く持ちます。左記の十年の歩みに接して一年一年を努力と創意によって築いてくださったことがよく分かります。

学区・学校づくりに貢献された皆さんに心から感謝いたします。十一月八日に創立十周年記念式典が開催できることを共に喜び合いたいと思います。

十年の歩み

年・月・日	学 校 関 係	学 区 関 係
昭和五八・ 四・ 一	若松・上地両地区の区画整理事業により市内三五番目の小学校として創立 野田守司登校長 早川正己教頭 児童数 五八一	学区人口 四三六九 戸数二二二〇 子供会・婦人会・社教委員会・総代会発足(四月)
四・二四	スポーツ少年団結成	幹線道路の完成(二四八号線・衣浦線)(三月)
五・二八	愛知県緑化大会を本校で開催	
五九・ 二・二六	校訓塔「力いっぱい」を設置	
四・ 一	野田守司登校長 土岐久夫教頭 児童数 六四一 職員数 二六	学区人口四九一〇 戸数二三五八
四・ 九	体育館・プール完工式	



八・四	西運動場遊具完成	
九・二五	西三バレー優勝(女子)	
六〇・一	野田守司登校長 土岐久夫教頭 児童数 六九八 職員数 二六	学区人口五三〇六 戸数一四九〇
九・二七	道徳教育研究中間報告会を開催	学区市民ホーム開設(四月)
六・一	野田守司登校長 土岐久夫教頭 児童数 七六五 職員数 二八	学区人口五六〇一 戸数一五八六
六・二三	道徳教育研究発表会を開催(市教委指定)	童南中学校開校(四月)
	「心豊かに力いっぱいやる子の育成」	
九・二七	運動場夜間照明点灯式	
六二・三・二〇	実践記録『上地の風』第一号発行	
四・一	嶋田 稔校長 土岐久夫教頭 児童数 八一八 職員数 三〇	学区人口六〇〇六 戸数一七三二
八・二	バレー東海大会優勝(女子)	子どもの家完工(四月)
六三・三・五	校歌制定、開校五周年記念「とべ上地っ子」の石像設置	
三・一五	実践記録「ふるさと上地」(『上地の風』第一号)発行	
四・一	嶋田 稔校長 柴田 誠教頭 児童数 八九九 職員数 三三	学区人口七二五三 戸数一九七四
七・四	バレー県大会優勝(女子)	大谷公園完成を祝う会(六月)
八・二三	バレー全国大会に出場(女子、ベスト一六)	
平成元・四・一	嶋田 稔校長 松原暁三教頭 児童数 九三二 職員数 三六	学区人口七四三二 戸数二二二四
元・六・二三	学習指導自主研究実践報告会を開催	上地地区新町名に変更(五月)
	「学級づくりを基盤とした学習指導」	
元・七・三	上地区画整理組合事業完成記念「なかよし池」開き	上地地区区画整理事業完了(十一月)

八・二三	バレー全国大会二年連続出場(女子、ベスト一六)	
九・一	実践報告会の記録(『上地の風』第五号)発行	
一一・一	ソニー教育振興財団より優良校受賞	
二・一・一〇	校舎増築家庭科・図工特別教室完工式	
三・一二	中庭にコンピネーション遊具(レインボータワー)完成	
三・一五	実践記録『続々ふるさと上地』(『上地の風』第六号)発行	
四・一	嶋田 稔校長 松原暁三教頭 児童数 九五五 職員数 三七	学区人口八〇四〇 戸数 三七八
八・二三	バレー全国大会男子女子出場	十周年記念事業実行委員会発足
三・一五	実践記録『続々ふるさと上地』(『上地の風』第七号)発行	(九月)
四・一	嶋田 稔校長 松原暁三教頭 児童数 九六〇 職員数 三七	学区人口八一八四 戸数 四四四
八・二三	バレー全国大会出場(女子)	
一一・二三	ふれあい牧場完成	
四・二・二四	創立十周年記念「ふるさと上地」の石像設置	
二・二三	県教育委員会より図書館教育奨励賞受賞	
三・一九	実践記録『ふるさと上地』(『上地の風』第八号)発行	
四・一	深津 武司校長 松原暁三教頭 児童数 九八三 職員数 三八	学区人口八七三六 戸数 五三三三
五・三〇	郷土読本「うえじ」発刊	
一〇・三〇	十周年記念誌「上地」発刊	十周年記念誌「上地」発刊

## 育ちつ 思いやりの心



学区・学校創立十周年式典に想つ。

大勢の皆さんのご支援によって式典が無事終了しました。学区と学校の連携の大切さを一層強く感じました。幸せは他から与えられるのではなく、自ら築いていくものであることをお互いが理解しあえました。児童代表の服部哲也君の述べたお礼の言葉の中に「・・・十周年を記念するふる里土地像も立派にできました。そのやさしさが上地っ子のみんなに通じ、みんながもっとやさしくなって、思いやりの心が学校中に広がったらなあと思います。」と言っています。校訓「力いっぱい、自分だけでなく、みんなのためにもと考えていきたいものです。」

記念式典当日午後。劇団たんぼの講演「花のき村と盗人たち」には多くの人が心が洗われたと言っています。花のき村に現れた盗人たち、その頭領が村の娘の温かい心に接して改心していくお話でありました。俳優さんの真剣な演技も去ることながら人間の心のあり方を感じさせていただけてよかったと思います。思いやりの心・信頼の心のすばらしさを学ぶことができました。

### 学区をきれいに

先日、五年二組、五年五組の子どもたちが、大谷公園や砂川の清掃に出かけました。学校で自然と学区のことが話題にのぼり、みんなできれいにしようという話がまとまり、自主的な活動が進められました。そういえば、十周年記念式典の前日や当日、五年一組の子どもたちが、これまた自主的に校門を中心に清掃活動をしてくれました。また、六年生をはじ



め他の学年もいろいろな活動が進められていたと聞きます。

掃除の時間の活動とは異なって、思いやりや勇気がなくてはできないことです。こうしたボランティアの心は、今後学校でも家庭でも、地域でも大切にしていきたいものです。

### 大谷公園の掃除（五の五）感想文より

遊具の周りで掃除をしました。池のとなりの所がきたなかつたのでやった。どんどん中の方へ行くと、ダムのようにごみがたくさんあった。また機会があればきれいにしたい。

内田 恵子

大谷公園の掃除を一回はやりたかった。なぜかという、人々のために何かやりたいと思ったからだ。僕は池は友達だと思っている。ぼくも、これから自然を大切にしていきたい。

金田 晋也

### 文化展記念講演に感激

十一月二十一日（土）学校文化展・授業参観・記念講演が開催されました。文化展では子供の作品とPTAを中心にした学区の皆さんの作品を鑑賞することができました。一人ひとりの個性のすばらしさにお互い感心しました。

講演会では、本校常任講師として三年目ごとにお話をいただいている元教育長、鈴木正弘先生におこしいただきました。

「このごろのお母さん」と題してすてきなお話をしてくださいました。七・五・三のお話からは、昔のお母さんが子育てのために、何を思い、いかに努力されていたかを改めて知ることができました。また、子どもの成長にとって、お母さんの笑い声は何者にもまして栄養となっていることを教えていただきました。世の中の変化が激しく、価値観も多様化していますが、特に、人としての心のあり方は不易であります。明るくやさしい笑顔があたえる大きく深い意義を体感することができました。それは、子どもだけでの問題ではなく、家庭や地域社会に通じる真理であります。私達にとって感激の一時間三十分でありました。

# 子どものもの 子どもによる 子どものための 上地っ子文化祭

子どもたちの企画・運営による上地っ子文化祭が、十二月七日(月)に丸一日を費やして展開されました。

学校で上地っ子文化祭がありました。午前中は、げきや歌の会がありました。わたしたちは「こぶとり物語」を演じました。ちよっぴりどきどきしました。午後が、こりやまたお楽しみ。ガマモグラちゃんコーナーも、みっちゃんすもう部屋に行き、何よりおもしろくてこわかったのは、ガタガタコーナー。これは、行かなきゃぜったいそんだったよ。

(三年 本多 志帆)

この文化祭、「ふれあい」をテーマに、次の日程で行われました。

## 第一部(午前)

「上地っ子パラダイス」全児童が体育館に集まり各学年(学級)の出し物で全児童がふれあいます。

現代っ子の特徴が出ていますので、演題を紹介します。一年「おいも音頭」「宇宙人のテレバシー」(歌と踊り)、二年「あわてんぼうのサンタクロース」(歌えバンバン) (劇と歌)、三年「こぶとりじいさん」「ジヤンボゴリラと竹の子」(劇と歌)、四年「仮装劇場」(にんじん、トマト、ジャガイモ、まめの仮装劇)、五年「本当にあった山の学習事件」「ザ、先生の紹介」「五の二の一日」「モシャウサカ物語」(劇)、六年「マジックショウ」「天と地」「若貴物語」「修学旅行」(マジックと劇)

## 第二部(昼食時)

「ふれあい会食」全児童が通学団別に分かれて、教室で会食します。会食でふれあいを深めます。

## 第三部(午後)

「体験ふれあいコーナー」 四年制以上の各学級が、それぞれ知恵を出し合って、他の学級の子に楽しんでもらう体験コーナーを作りました。四年以上で十四学級の十四コーナーあるわけですが、大きくまとめる次のようになりました。

- ・大迷路(君はゴールにつけるか)
- ・カラオケコーナー
- ・ストレス解消コーナー(もぐらたたき)
- ・すもう大会
- ・おぼけ屋敷
- ・各種ゲームコーナー
- ・日本縦断ウルトラクイズ

他の学級の児童を迎え、楽しんでもらうために係分担当がなされています。前半後半と各係が代わって、学級のコーナー運営と他の学級コーナー見学をします。人気コーナーは長蛇の列となりました。さて、子どもたちの反応はどうでしょうか。

- ・一くみと二くみと三くみのみんなで、どんくんおんどをおどりました。おどっているとき、ちよっときんちようしました。じょうずにおどれました。ほっとしました。とってもおもしろかったです。(一年 むとう りえこ)
- ・あわてんぼうのサンタクロースをうたいました。ぜんこうのみんながよくみえて、わたしだけをみているような感じがしました。はずかしくなっていました。はくしゅをもらってうれしくなりました。(二年 古川 夏希)
- ・自分たちの作ったコーナーは大成功です。みんなが来てくれました。私は待っている人を楽しませる係です。友だちも協力してやりました。一人ひとりがいろいろ工夫していただきました。すごいなと思いました。(四年 鈴木 紅里)
- ・みんなでコーナーづくりでがんばった。手作りのスロットマシンと、もぐらたたき。おおぜいの人が来てくれて感じました。来年もクラスがちがうががんばりたい。(五年 本多 紀仁)
- ・修学旅行があつてコーナーの準備や、出し物の準備があまりできませんでした。だけど、私たちのコーナーは、自分が思っていたよりもおおぜいの人が来てくれました。とってもうれしかったです。(六年 白濱佐知子)

子ども自身で作りに上げたこの文化祭。一人ひとりがそれぞれ苦労と喜びを味わい「ふれあい」は達成されたように思います。来年度はテーマを生活と密着させ、未来に生きるための知恵を育て、夢を育み、一層深まりのある文化祭になるよう援助したいと思います。

## とり年を迎えて



うれしさ一杯無事十周年  
えがおで迎えた新春酉年  
じぶんらしさで歩の羽ばたけ  
(学区新年交礼会)

・新年おめでとうございます。昨年は、学区・学校創立十周年諸事業を学区並びに関係各位のご支援によって無事終えることができ感謝申し上げます。本年は「温故知新」を胸に、学区・学校のみよものを生かし、新たな出発を目指します。また、全児童に親しまれている本校ふれあい牧場のにわとり「チヨロー」の年です。児童一人ひとりの個性の伸長を図ると共に、人と環境のつながりを大切に  
して前進します。  
(東海愛知新聞)

今年はとり年です。ふれあい牧場のにわとり、ちゃぼ、その代表として「チヨロー」の年です。

そこでチヨローのよいところを見習っていきたいと思います。よいところはたくさんありますが、一番よく世話をしている長坂先生と相談して、ベスト3をお話します。

その1 姿勢がよい。歩く時は、自分が進む方向へ胸を張って堂々と、一步一步進みます。

その2 みんなとすぐ仲良しになる。学校中歩き回って、誰にでも近づいています。みんなも大切にしていますね。

その3 コケッココと鳴く時、胸をはり、首を上にはばして、力いっぱい鳴きます。気をゆるめたりいいかげんに鳴くことはありません。

みなさんもチヨローを見習うと同時に、自分の目標に向かって頑張りましょう。

(三学期 始業式)

## 子どもたちに夢を — 風車をつくらう —

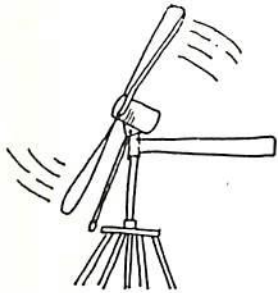
「地球は青かった。」最初の宇宙飛行士であるガガーリンが言いました。

また、昨年飛行した毛利さんのメッセージにも「青く輝く水の惑星、大気汚染で地球を汚したくない。」と書いています。『環境を大切に』の問題は複雑ですが、私たちは、まず自然を知ることから、また身近なところから出発しなければなりません。ふれあい牧場のにわとりが放し飼いになっているのも自然を学ぶ上で大切です。学校・学区の環境を学ぶ中で、生活を見直していくことができたいと思います。郷土読本「うえじ」も大いに活用しています。人と人、人との、人と動植物、人と気象などの関係を一層深めたいと思います。

その一環として、今、風車を作ることを構想しています。風に向かってくるくるまわり、風が強ければ強いほど、元気に回る風車。

これは、本校の校訓「力いっぱい」をイメージすることが出来ます。また、風のエネルギーを電気エネルギーに変えて、明かりをつけたり、オモチャを動かしたりすれば、科学の芽を育てることが出来ます。更に、これに加えて、風向風力計、雨量計等が設置できれば、気象にも関心が向けれると思います。

風車の規模、一定電力を供給するためのバッテリーの問題、建てる位置、安全性など課題は数多くありますが、皆さんの協力を得て構想していくつもりです。



## 学芸会で学んだことは

平成四年度学芸会が一月三十一日大勢の参観者を得て開催されました。どの学年、どの学級も心をひとつにして私たちに感動のひとつときを与えてくれました。日程の関係から、一・三・五年生は学年まとまっての合唱・合奏を中心に、二・四・六年生は、学級ごとの劇を中心にして参加をしました。練習は月中旬から始まっていますので、そんなに多く取れません。寒さに耐えて集中した練習となります。また風邪との戦いもありました。

子どもたちは練習と当日の発表から何を学んだのでしょうか。二年生と四年生子どもは次のような感想を述べています。

◎ぼくは、おひめさまとおかあさんのやくをやりました。おかあさんのやくをやるとき手がふるえました。また、おひめさまのやくなんて、もつたらんだキドキしました。おほほほっていうとき、ドキドキドキドキドキドキしました。おわたたとき、つかれたと思いました。

(二年 市川生)

◎みんなの心を合わせてやったので楽しかったです。きんちようしましたが、一年や二年のときよりしつかりでできたと思っています。この学芸会で少し自信のようなものができました。最初は小さい声で動きも悪かったです。声もだんだん大きく出せるようになります。それと拍手が多くて元気が出てきました。

(四年 加藤 和久)

子どもたちは、一見楽しそうに演技していますが、市川君のことばにあるように、大変緊張しています。客席からは見えませんが手や足がふるえたり、心臓が高鳴っています。四年生ともなると、少し心に余裕が出て、楽しみながらやっています。また、自分で自分を見つめる力もつてきます。客席からの拍手で、いきおい元気が出て頑張っていくことがわかります。一年の合唱と合奏。一年生としては大きな目標に挑戦してよく頑張りました。太鼓の響きもよく練習の成果が出ていました。三年の歌声も元気いっぱい、オズの魔法使いのテーマ、知恵や勇気を求めての歌声に一人ひとりが夢を持っていました。五年の歌声は高学年として心一つに感動の一場面を提供してくれました。一糸乱れず、目をみはるものがありました。

◎校内学芸会では、先生たちからなつくつくものになっていないと言われました。本番では、お客さんや先生になつくつくそれ以上のものをやりたいと思っていました。ステージに上る前、先生は「みんなを信じる。」と言いました。僕は、ステージに上る前ドキドキしました。ナレーターのリフが入り、始まりです。先生たちに信じられたんだから、みんないっしょけんめいでした。その時太一君が涙を流しました。僕も目に涙をためていました。お客さんもそうだったと思います。百二十%の力を出したかどうかは不安ですが、先生は、「みんなの劇は、どこを見てもはさしくない。」とってくれました。『泣いた赤鬼』、今やってよかったと思っています。

(五年 山本 健吾)

◎今、劇が終わって、本当の友情というものがわかったような気がします。練習ではいろいろな注意を受けました。だからこそいい劇になったと思います。劇の途中泣けてきました。お客さんも泣いていました。この気持ちを六年生になるまで残しておきたいです。

(五年 藪本 託也)

この満足感、ハーモニーの美しさはどこからやってくるのでしょうか。単に歌う技術だけの問題ではなさそうです。合唱劇のテーマである「友情」を早く理解していったということです。練習の過程で教師と子どもたちが一つの目標に向かって、どれだけ人間関係を深めていったかで学習の成果が決められたと思います。このことは、すべての演技について言えると思います。六年生では、小学校最後の演技であるだけに意気ごみは一段と深いものがありました。

◎最後の場面が来ました。子守歌を歌って出てくるんだけど、悲しい場面に泣けてしまって、うまく歌えませんでした。劇が終わりました。力を出し切ったこともあったのかとても泣けて涙が止まりません。「先生、やったよ。成功したよ。お客さんもみんな感動してたね。みんなの気持ち一つになったよ。」と心の中でつぶやきました。最後のメッセージ『どんなに苦しくても負けちゃいけないのじゃ、へこたれちゃいけないのじゃ。・・・』、この言葉は大人になっても忘れません。

(六年 高野瀬 弥生)

表現力と共に一つのものをやりとげた自信と喜びの中に数々の大切なものを学んだと信じています。

三、教室の窓

新上地八景



1 奥山田池

区画整理事業以前は、岡崎市南部丘陵地帯の灌漑用ため池の一つであった。池の南北は雑木林に囲まれ、勤労福祉会館の外灯に映える夜景も美しい。野鳥の憩いの場でもあり、四季を彩る樹木の開花はまた格別である。

四月六日、入学式の日。私たちにとっては、初めて担任する一年生の子供たちとの出会いの記念の日でした。お父さんやお母さんに手を引かれて期待と不安の入り混じった顔で校門を入ってくる子供たち。入学式が終わり教室に入った時、三十五人の子供たちの目が、私を見つめていました。それを受け止める私自身も緊張し、頭の中は真っ白でした。でも、この時「この三十五人の子供たちが喜んで学校へ来てくれるようにしなければ。」と強く思いました。

初めの一週間。私にとっては驚きの連続でした。子供たちが学校へ来てやることと言えば、靴やロッカーの中の整頓の仕方トイレの使い方や手の洗いや、並び方の練習などです。子供たちは「先生、いつから勉強するの？」まるで勉強しているという意識がありません。私も子供たちとまったく同じ気持ちでした。もちろんこれらのことは学校生活を送る上で基本となるとても大切なことです。今まで二年生以上の子供たちとのつき合いばかりだった私にとって、整頓や手洗いができるのが当然であって、一年生の時に勉強するものだという事に気づきませんでした。

二週間目。だんだん学校に慣れ、元気になってくる子供たち。放課になると「待ってました。」とばかりに元気よく教室からとび出していきます。でも、最初のうちは「遊具やボールはまだ使ってはいけないよ。」と言うと「どうして。」「ええ、まだあ。」「つまらないなあ。」と残念そうでした。木曜日、足場の悪い中、遊具の遊び方を勉強しました。子供たちは足場の悪さなどものともせず、「先生、靴がよごれちゃった。」「服がぬれちゃったよ。」と言いながらも夢中になって遊んでいました。元気のいい子供たち、鉄砲玉のように一度飛び出していったら、なかなか戻ってきません。

四月二十日。いよいよ一日授業の始まりです。子供たちが楽しみにしていた給食もあり、そうじもあります。給食の時間、給食当番の子供たちはエプロンを着て帽子をかぶり、マスクをしてさあ準備OK。





「今から、一年生を迎える会を開きます。」

矢田竜司君と飯田寛美さんの元気な声で、会は始まりました。五月十五日、今日は生活科の勉強として、一年生を迎える会を開く日なのです。私たちのクラスは、一年四組を招待しました。この会が開かれるまで、子供たちは一生懸命話し合いに取り組んできました。

「劇がいい。」

「紙芝居をやったらいい。」

「宝探しゲームをやりたい。」

などなどさまざまなアイデアが子供たちの中から出てきました。

どれもみんなやりたいものばかりでした。でも限られた時間の中で

一 はじめのことば

二 クイズ

三 たからさがしゲーム

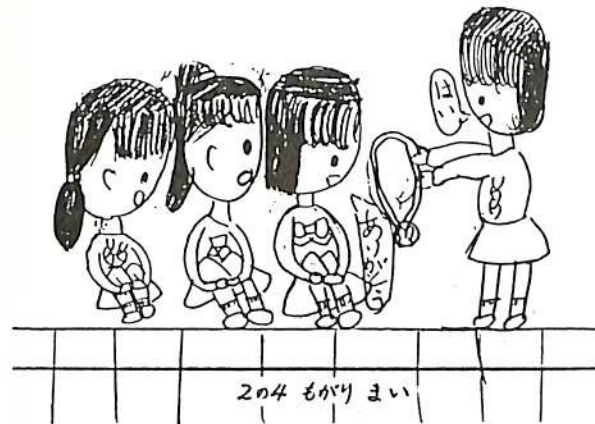
四 プレゼントコーナー

五 おわりのことば

やるには、意見を絞っていかなければいけません。

その中から、次のものが決まりました。

さあ、いよいよ準備です。司会、クイズ説明係、宝さがし説明係、プレゼント説明係、時計係、く



じ作り係、招待状作り係などみんなで仕事の分担をしました。

クイズ係は、一年生でもわかるようにやさしい問題を考えてきました。例えば、「一年生の先生は、何人いますか。」といったものです。

クイズをぼくはがんばりました。もんだいを出すときは、ドキドキしたよ。だけどがんばってやったよ。そのとき、

一年生は、よく知っているなどおもいました。

(矢田 渚)

宝探しには、みんなで悩みました。宝を何にしたら良いだろうか。宝をどこに隠したら良いだろうか。結局、宝には牛乳キヤップを使うことになりました。二年一組から四組までの二日分のキヤップを集め、それにクレヨンで色を塗りました。全部で四百個近くの宝がで上がりしました。宝を隠す場所は、教室の後ろ半分です。そこに新聞紙をいっぱい敷きつめ、その中に宝をはさんでおくのです。

・わたしは、きょう一年生をむかえる会をしました。たからさがしするとき、みんながとても元気だからびっくりしたよ。男の子のときには、すごいあらしみたいだったけど、女の子のときは、ふつうの海ぐらだったよ。わたしも、

「海だ。海だ。」

とってあそんじゃったよ。

(渡辺 愛)

・ぎゆうにゆうのふたを、しんぶんしのどういところにかくせばいいかあたまをつかったよ。しんぶんしの下のほうへ入れたほうがよかったよ。一年生は、下のほうをさがさなかったから大せいこうでした。

(鈴木 哲司)

・一年生の子が教室のドアの前に立っているとき、わたしはむねがドキドキしました。たからさがしのときは、一年生の子がしんぶんをめちゃくちゃにして、なげたりけったりしていたよ。わたしは、じぶんもはいたりたくなつたよ。

(備後 里砂)

一年生へのプレゼントは、子供たちが心をこめて作ったメダルです。一年生に二年生の子供たちの名前の書いてあるクジをひいてもらい、そのクジを引いた一年生に自分の作ったメダルをかけてあげるので。誰にあげるかわからないので、子供たちはもうドキドキです。

・プレゼントをわたすときは、くじをひいてもらいました。くじをひいてもらったら、わたしのが出ました。女の子にわたすとき、ドキドキしたよ。また一年四組といっしょにあそびたいです。

(天野 里香)

・ぼくは、一年生をむかえる会のじゅんぴがとてみたいへんだったけど、一年生がきたらすごくたのしかったよ。やっぱり、いっしょうけんめいじゅんぴをしてよかったです。たいへんなことをやれば、いいことがあるんだなとおもいました。こんなにたのしいことは、一どもないです。きょうのことは、ぜったいわすれません。

(山本 勇矢)

一時間中、二年生を楽しませるために動き回っている二年生を見て、とても頼もしく思えてきました。本当に、良きおにいさん、おねえさんでした。

## 「もう一人のわたし」の制作より

三年生担任 遠山 洋子

「先生、その大きな紙は、なんに使うの？」

「もう一人の私をつくるんだよ。」

子どもたちの目が、私の持っている大きな紙包みに集まってきました。図工に「もう一人、わたしがいたら」という題材があります。厚紙で自分と等身大の人形を作り、自分の夢や希望などの思いを膨らませていくものです。首や肩・肘などの関節の部分ピンでとめ、動かすことができる人形です。

まず、自分の肘や膝などの曲がる場所を確かめることから始めました。次に、身体を十の部分に分けて写し取るように説明し、四枚の厚紙を配りました。身体を写し取るときに友達と助け合って作業を進めるように話しました。見本に作った小さな人形を見せると、

「おもしろい。見せて、見せて。」

と、集まり、足や手を動かしてポーズを作っていました。これから作る「もう一人のわたし」のイメージが湧いてきたのでしよう。紙を手にした子どもたちは、机やイスを寄せて広くなった教室の思い思いの場所に紙を広げて作り始めました。紙の上に腕をのせて、写している子、足から写し始める子、紙の上に寝て友達に体を写してもらう子など様々です。「すてきな自分を作るぞ。」という意気込みがどの子からも感じられ、みんなの目が生き生きしています。きっと楽しい作品づくりができると嬉しくなりました。

「手は、ひらいたほうがいいかな。」

「かいてくれる？」

「いいよ。次は、わたしだよ。」

「わあ、へんになっちゃった。どうしよう。」

教室には、真剣に取り組む子どもたちの声が飛びかかっていました。

「先生、できた。」

嬉しそうに紙を抱えて見せにきました。

「そうだね、でも右手と左手の太さが違うよ。もう一度描き直し

てごらん。」

「足の長さが違っていているけど、いいの？」

と、ひとつひとつの細かい部分を見直させました。何度目かに、「合格。切ってもいいよ。」と言うと、子どもたちの顔がにこっとして「ああよかった。苦労したんだよ。」と語りかけているようでした。

組み立てが終わりでき上がった子は、苦労している友達を手伝っていました。助け合って作っている姿は、とても微笑ましく胸がじんとききました。きっと大切な作品になるでしょう。

人形の組立が終わったところで、感想をかかせてみました。

「もう一人のわたし」（鈴木紗恵子）

私がもう一人いたらいいなと思ったことが、私はいっぱいあります。宿題をしているとき、とくいじゃないスポーツをしているとき、いろいろなあります。そういうとき、私は、忍者はいいな、魔法使いはいいなと不思議な力のある人を思い浮かべます。そうなので、この「もう一人の自分を作りましょう。」と聞いたときは、心がうきうきしました。

はじめに、自分の体を紙に写してみました。思ったより難しかったので、頭がいたくなってしまいました。でも頑張っ  
てかきました。亜純さんが私の手をかいて、私が亜純さんの手をかきました。私たちは、いろいろなことを言いながら楽  
しくかきました。あとで気がついたけど、同じ足を二枚もかいていました。やり直してちゃんとした足をかきました。

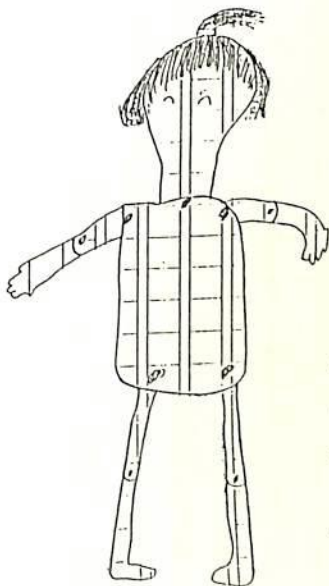
「もう一人のわたし」（三宅明樹子）

五時間目に「もう一人のわたし」を作りました。先生の話聞いて、やったあーと思いました。図工の教科書を見て、  
私が一番やりたかったのだからです。でも、やってみると少し難しかったです。でも、楽しかったよ。やつとはさみで切  
れると、いよいよ組み合わせ。どきどき、わくわく。いよいよだと思いました。

組み合わせがやつとできました。私より背が低いみたいでした。でも、私は嬉しくて嬉しくて、その気持ちを誰かに伝  
えたいくらいでした。

その他に「友達に助けてもらったから、今度は、やつてもらったよりたくさん手伝ってあげたい。」とか「上の服は、本物  
の服を着させて、スカートもお母さんがいいと言ったら着せてあげたい。自分と同じ人形を作りたい。」と書いている子もい  
ました。でき上がった人形を自分の分身のように感じている様子がうかがえます。子どもたちが、こんなに真剣に取り組んで  
くれたなんて、なんとすばらしいことでしょう。

今、教室の机の横には、様々な袋がかかっています。「もう一人のわたし」のために集めてきた服や布・包装紙・毛糸など  
がつまっています。子どもたち一人一人の思いやアイデアを大切に、すてきな作品となるように制作活動を楽しく進め  
ていきたいと思っています。



（鈴木真由美）

## プールにあふれる笑顔の主人公たち

四年生担任 深津仲夫

「先生、今日、何時間目にプールに入るの。」

「天気が良いくて、みんなの調子が良かったら三時間目に入るよ。」

駐車場から職員室へ向かう私を待ちかまえていたかのように体育館の横を歩いてくる松原君との朝の挨拶です。六月の後半からは毎日のようにこんな言葉を交わしました。

気温が少しずつ上がっていき、ちょっと動いただけで額に汗が光るようになってくると、誰でもプールに入りたいと思うものです。私は小学生の頃から水泳部に入っており、今でもプールに入ることが大好きなので、一時間でも多く水泳の授業がしたいと思っていました。でも六月の初めは天気が不安定で気温も水温もなかなか上がってはくれません。プールに入るまではよくても、水の中では十分もたないうちに唇が青くなってしまいうちもいるほどでした。

クラス全員で楽しい水泳の授業がやりたい、これが一番の目標でした。水泳というと、泳ぐことが得意な子と苦手な子とでは気持ちの上でも大きな差があります。四年三組でも、バタフライまで泳げる子もいれば顔を水につけるのもいやだという子もいます。でも泳げる子は良い子で泳げない子は悪い子ではないのです。苦手意識のある子に大きなプレッシャーを与えても、泳力が伸びるところか水に対する恐怖心が増すだけです。プールでの遊びの中では、泳げる子も泳ぐのがあまり得意でない子も同じように楽しく遊ぶことができるのだから、授業でも楽しくできないはずがありません。

そこで水泳の授業では、二十五メートル泳がなくなるとはいけなとかクロールの呼吸が横を向いてできるようにしなくてはならないという目標の前に、「いろいろな浮き方をしてみよう。」とか「水面を自由に動き回ろう。」という目標をたてました。ただ浮くといってもいろいろなものを考えることができました。ビート板を持ってラッコのように浮いてみたり、おなか

の下にビート板を置き、顔を上げた姿勢で浮いたり、両足でビート板の上に乗リサーフィンのように浮いたりしました。このように子どもたちが遊びの中から考え出す力というのはすばらしいなと思いました。

このほかにも水の中で手をつないで回ってみたり、二人組になって補助をしながら浮き身の練習をしたりしました。友達と助け合い協力し合う授業の中では、泳げる者も泳げない者も一緒になってプールの中で動き回る楽しさを味わっているように見えました。

今日、プールに入りました。それです、ばた足をやりました。いつもより長くやっていたので足がいたくなっていました。それで、めあてが『ビート板を使って水面を動き回ろう』というめあてだったので、高学年プールにいこうしました。それでビート板にのって左右に回ったり、後ろにバックしたり、いろいろな動きをしました。初めはふらふらしたけど、だんだん自由に動けるようになりました。



最後にリレーをやりました。プールの真ん中に旗を立てて、そこをビート板に乗って回るルールでした。わたしたちのチームはどべだったのでくやしかったです。でもとても楽しい授業でした。

(佐野 恵子)

泳ぎを練習するというよりは、プールでの遊びを中心に水泳の授業を進めてきましたが、その中で子どもたちは、水に浮いたまま左右に動いたりバックしたりという今までにない新しい体験をしました。友達と助け合い、励まし合いながら練習する喜びを見つけました。そして何よりもプールに入ることの楽しさを感じることができたと思います。

一学期最後の水泳の授業で、みんなの泳力を測定するにしました。去年よりも上手に泳げるようになった子がたくさんいたのは嬉しいことです。そしてそれにも増して、プールに入る時に見せるみんなの楽しそうな顔は忘れることができません。きっと夏休みもまぶしい笑顔がプールの中で見られることでしょう。



## 性 教 育

五年生担任 酒井幾子

- 「ねえ、先生知ってる？うふふ・・・。」  
「あのね、先生『セックス』って知ってる？」  
「みんなは、知っているの？」  
「ぼく、知っているよ。辞典で調べたもん。」  
「調べたの？じゃあ何て書いてあった？」  
「『男と女が合体すること』と書いてあったよ。」  
「ねえ、先生はやったことあるの？」  
「きゃあ、いやらしい。」



(柎木ゆみ)

放課になると、近くによって来てはいろいろな話をしてくれる子どもたち。情報化社会のため、テレビ、雑誌などから善しに受け悪しきにつけ、いろいろなことを耳にします。そのためか、時には子どもたちから驚くような質問や言葉が出てきて度胆を抜かすこともあります。

五年生にもなる異性への関心も高くなり、好きな子に手紙を出す子も出てきました。また、自分たちの体つきが大人に近づくことが少しずつ気にもなりはじめました。先日も、

「先生、胸のさきっぱががゆかったのかいいたら、ちょっと先がふくれちゃったよ。」

「先生〇〇ちゃんも生理がきたんだって。これで四人目だね。」  
など、体に対し関心が出てきました。

保健の学習をする前に、自分たちの体つきが大人に近づくことが気になっていたかアンケートをとってみると、男子二十一人中八人、女子十五人中七人が少し気になっていたと答えていました。

五年生の一学期に「からだの発育」について学びました。内容は、体は年齢に伴って変化し、体の発育には男女や個人によって違いがあること、男女のからだつきの変化について、思春期に起こる体の変化（精通現象、発毛現象、声がわり、初経現象）です。子どもたちが、できるだけ偏見を持たないよう、いやらしいものと思わないよう、ビデオやマグネット式の体の様子を表した絵図を用い話をすすめていきました。

学習の初めは、いやらしいことだろうなと思っていた子どもたちも、内容が自分の体のことなので、だんだん真剣に受け止めるようになりました。マグネット式の絵図で男と女の体の作りを説明している時です。

「先生、人間の赤ちゃんってどうやってできるの？」

「そうだね。では理科で習ったメダカはどうだったかな。」

「メダカはメスが卵を産むときに、オスが精子をかけていたよ。」

「人間は（図を指しながら）この卵子と精子がくっつくとき赤ちゃんができるんだよ。」

「ふーん。これが合体だね。先生は二人子どもがいるから二回合体したんだね。」

「そうゆうことかな。でもね、いくら卵子ができてもうまくくっつく相手が相手がいないと卵子はこの中に入っておれなくなってしまうことになるんだよ。いつでもすぐに合体できるわけじゃあないんだよ。先生は、子どもが欲しくってね、子どもがおなかの中にできたときとわかった時、とてもうれしかったんだよ。生まれてくるまでどんな子かな、元気かなって思っていたんだよ。きっとみんなのお母さんだって先生と同じような気持ちだったんじゃないかなあと思うよ。」

「せっかく卵子があるのもったいないね。でもどうやって精子と卵子をくっつけるの？」



(新井彩香)

「ふしぎだね。そのことが詳しく書いてある本が図書館にあるので、二学期に読んであげるね。」

いろんなことを耳にして興味のある子にとっては、このことが一番知りたかったに違いありません。でもクラスの中には相づちを打ちながら話を聞く子から、今日が初めて話を聞く子まで個人差があります。したがって一度にたくさんの方を行っては無理があるので、一部の子どもは残念そうでしたが、二学期に読むことにしました。

保健の学習を行った感想を聞いてみました。

☆学習をした感想は？（複数回答可）

びっくりした	12	男
はずかしかった	4	
おもしろかった	2	
勉強になった	5	
やってよかった	4	
不安になった	1	
不安がなくなった	2	
いやらしいと思った	6	
	7	女
	6	

☆精通（男子）初経（女子）について聞きます。

もうきている	1	男
自分ももうすぐだと思う	2	
まだまだ先だ	19	
考えていない	3	女
	6	
	1	

☆まだ来ていない人に聞きます。



(深水菜美子)

早くこいと思っている	2	男
ずっと先だと思っている	4	
他の人と同じくらいの時期	15	
にくればいい	4	女
	8	

☆保健の学習のことを家で話しましたか。

		男	女
くわしく話した	0	6	0
少しだけ話した	0	9	1
これから話したい	2	1	0
	7月	19日	現在

★保健学習を行った感想

・ぼくは初めて知ったことや聞くことがいっぱいありました。それに今まで自分の体のことについて考えたことはありません。最初はエロイかなと思いました。でも、聞いたり見たりしていたら大事なことをいっているような気がします。自分たちも大人に近づいているんだなあと思いました。これからはみんな成長していき運動や勉強をして強い身体を作っていきたいです。

・私は、前から女の子は誰でも生理になるって知っていたけど、ビデオを見た時、あんな複雑な仕組みになっているなんて思ってもみませんでした。

・ぼくは、自分の体についてすばらしいことを勉強しました。赤ちゃんが生まれるのは男は関係ないと思ったけど男がいないと赤ちゃんが生まれないことを知りました。それで、男もすばらしいことをするなあと思いました。

現在、クラスの中には夏休み中に初経の来た子や時々健康に関する本のならべてある保健室に足を運ぶ子がいます。また、「先生、早く約束の本を読んで。いつ読んでくれるの?」

という子も出てきました。性的にみだれた時代だからこそ、精神性を重視した性教育を行っていきたいと思います。

## 子どもは等しく感じる心を持っている

六年生担任 木村 和子

人の心 川村 千尋  
人は何か一つ、その人にしかできない役目を持って生まれてくると思う人には犬や猫とかと違ったところがある。いろいろあるけど、一番人間が役立てなければいけないことは、感じて、考え、思ったりできる心だ。自分が何をやればいいのか、人間にしかない、感じる心を生かして、つかめるようにしたい。

六年二組を担任して七か月が過ぎました。その間、ずっと思いつけてきたことは、心が通い合うようなあたたかい学級にしたいということでした。互いに相手の心を受け入れ、信頼し合える(心の響き合い)ような関係を持ち、学級全体が一つになっていくような、そんな学級になったら、どの子もみんな、明るく生き生きと生活できるようになるだろう。このような願いをいだきつつ七か月が過ぎました。

互いの心を受け入れて信頼し合えるためには、一人ひとりの心が豊かになってゆくことが大切だと思います。ある出来事に出会った時、その出来事から何かを感じる心。あるものを見た時そのものの形や様子が分かるだけでなく、そこから何かを感じる心。そういう感じる心を育てることが心を豊かにしていくのだと思います。

現代は、物質が豊かな社会、多忙化の時代です。時間に追われ、出来事に翻弄され毎日が過ぎていくことは、めずらしいことはありません。そして、これは大人だけでなく、子ども達の生活を見ていると感じることです。

しかし、子どもの時代には、その時にしか味わえない感じ方(感覚や感動)があります。それを十分に感じさせてやるのが、心を育てていくうえで大切なこ



秋が来たすすきをゆらす風一つ

加藤 正和

青い空羊雲の行進だ

塚本 浩之

秋の雨寒さ厳しく白い息

丹下純一郎

原っぱのすすきの上にとんぼとぶ

天野 睦大

秋の空夕日が真っ赤に燃えている

鈴木 雅美

山々は紅葉の秋美しや

加藤 勝一

とに思います。子どもは純真で素直です。大人が持つ既成概念や固定観念が少ない分、大人が感じない世界を澄んだ瞳に映し表現することができます。その純真さや素直さを引き出していけるような場を作っていくことが大人にしてやれることだと思います。

私は子どもの感じる心を、詩や俳句、日記などを書くことを通して育てていきたいと思っています。

子どもにとって、文を書くことは、とても苦勞なことです。決まった答がないからです。こう書いたら丸がもらえるという明解さがないからです。自分の感じたこと、思ったこと、考えたことを書かなくてはなりません。しかし、書くということをしている中で、感じる心が育っていくのだと思います。書きながら、言葉を選びながら、自分の心を見つめたり、ふりかえったり、考えを深めたりすることができます。また、書くことによって思いが湧きあがることもあります。

私は子どもが書いてくる文を読むのがとても楽しみです。一人ひとり感じ方が違い、見ている世界が異なり、そこに個性を感じるからです。個性ある存在——それは、地球上にたった一人しかいないかけがえのない存在です。ですから、子どもの文を読んで、こういう文は良い、こういう文は悪いという見方は避けるべきことだと思います。一人ひとりを優劣であつかったり、比較をしてみても個性の尊厳を傷つけることになってしまおうと思います。一人ひとりそれぞれが感じる心

虫の音と父の三味線ハモってる

安田 晃

赤とんぼすすきの先で一休み

石黒 八枝

コオロギが夜空見上げて鳴いている

桃井 良宏

秋の日で赤く照らされた家ならぶ

広段 佳介

夕方に文字をえがいてとぶコサギ

佐野 祐子

秋の夜赤青黄の花火さく

沢田 佳子

を育てていってくれたらよいと思っています。

最近、子どもたちの文を読んでいて、気づかされたことがあります。子どもたちが、一枚文集に載った友達の文を読んで学び始めたのです。友達の心を感じて読むことができるようになってきたのです。友達の文を読み自分も同じようなことを感じていた、こういうことも書けるんだな、と同じ題材で書いてきたり、今まで気づかなかったことを友達を書いてきたことで、気づくようになり、世界が広がって、そのことを書いてきたりするのです。例えて言うなら、池に石を投げ入れた時、波紋がいくつもでき、岸まで広がっていくように、一人の感じたことが他の子の心に届き、それが学級全体に広がっていくという感じですが、この広がりが、響き合い（互いの心を受け入れていくこと）を生み出すのだと思います。そしてこの響き合いを繰り返していくうちに友達の心に気づけるようになり、信頼関係が深まっていくのではないのでしょうか。子どもは意識こそしていないけれどもと連帯性を求め、心と心の結びつきを願っているのではないかと感じられるようになりました。

わがクラスは、まだまだ未熟で、今、ようやく連帯の響きを奏でようと、歩き始めたところです。

卒業までの五か月間、一人ひとりが澄んだ瞳に映る世界を感じ、共に心豊かになっていくことを願っています。



宿題

エドワード ジュン

宿題はめんどくさい  
たまにテレビを見て忘れちゃう  
でも何か落ち着かない感じがする  
漢字とか、今やっている詩とかいろいろ  
ある。

一人だけで生きている  
長生きしようよ

一生けん命生きている  
元気を出して 生きてほしい

鉄棒

下向 江里菜

でも最後までやると  
とても安心するようない気分がする  
宿題はともいものだなと思う

前までできたさか上がり  
この前できたさか上がり  
今はもうできないね

とてもくやしい思いのままの終わりはいや

力強い心

桜井 淳

コンクリートと  
コンクリートの間から  
一人だけ雑草が生きている  
とっても力強そうに

手がまめだらけなのに  
練習してもできない  
何でも時たまできないことはある  
でもとてもくやしい  
何か一つできるわさがほしい  
ぜったいやってみせる

鉄棒

宮崎 竜也

鉄棒を久しぶりにやった  
ぼくはさか上がり  
できなくなっていた  
なんでできないんだ  
何回やってもできない  
それは  
ぼくが鉄棒をきらったからだ



月

小田 絵美香

夜 窓から月が見えた  
木と木の間から  
うつすらと見えた  
月の光が  
真っ暗な部屋にさして  
かけがえができた

価値のある人間

川合 満

価値のある人間とは  
自分のために尽くすのではなく  
人のために尽くせる人  
それが  
価値ある人間

友達

小柳出 愛

友達はいいものだ  
それはつらいことや  
楽しいことがあったら  
いっしょに泣いたり  
わらったりできるから

心の輝き

原田 綾子

きらきらと輝いている星  
でも輝きがにごるときもある  
心も良い考えを持っているときは  
きらきらと輝いている  
でも悪い考えをもつとにごってくる  
星と心は  
とてもよく似ている



わたしは

星をきらきらさせることはできない  
でも心はいつも輝かせていたい

そうじ

大島 加菜子

ほうきではいてごらん  
心のごみもなくなるだろう  
ろうかをふいてごらん  
心もびかびかになるだろう  
そうじ・・・たったほんの少しのことで  
心まで光り輝くんだよ  
みんなで心をこめてやれば  
そうじということが  
どれだけ大切か  
わかると思う

そうじは心まできれいにする薬

米谷 有美子

そうじは心まできれいにする薬だ  
初めはそうじなんて  
つまらないと思っていた  
だけどよく考えたらそれは大間違い  
ほうきでサッサとはいたら  
心の中のいやなことも  
さっさとはいてしまおう  
そうじは心まできれいにする薬

心を一つに

矢田 敏勝

運動会で心を一つにして優勝した  
どんなに弱いひとたちでも  
力を合わせて 心を一つにすれば  
きっと勝てる  
心の中で思った

本の良さ

川口 久美

今、私はベーターペンの伝記を読  
んでいます。ふだんあまり読んでい  
ないし、特別に読みたいと思ったこ  
とはあまりありません。  
だけど読んでみると、その人のこ  
とがよくわかるし、なかなかおもしろ  
いと、このごろは思います。  
むつかしくてよく分からない所も  
あるけど、少しずつ読んでいます。  
ふだん読んでいる物語や童話。私  
は助け合い、思いやり、やさしさな  
どいくつか教えられました。  
本を読むと心がきれいになります。  
私はこれからも本をたくさん読ん  
でいきたいと思います。

幸せ

竹井 聖子

わたしは  
「さっちゃんのまほうのて」  
という本を読みました  
その子は指がなくて  
いじめられていました  
それにくらべると  
私はとても幸せだと思います  
ほかにも  
足のない子や手のない子がいます  
それなのにわたしは  
じょうぶで元気に生まれてきて  
とても幸せです  
感謝をしたいです  
体の不自由な人の分まで  
生きていきたいです

わたしのクラス

酒井 美歌子

六年二組ってどんなクラス？  
楽しいクラス、やさしいクラス・・・  
でも、わたしは、楽しい先生と  
どこのクラス、どこの学校にも  
負けない何かがあると思った

かよいあっている心

勾坂 明子

六年二組は  
ふざけあったりしているけど  
とっても  
明るく、やさしい  
いいクラスだと思う  
なぜなら  
みんな心が  
かよいあっているからだと思う  
かよいあっている心があるから  
六年二組は  
いいクラスだと思う

みんなの心を一つに

大林 佳央里

クラスというものは、笑ったり、泣いた  
り、おこつたりと、いろいろなことがあ  
てできていくのだと思う。  
だから六の二というクラスは、みんなの  
心が一つになって本当の六の二というもの  
ができる。  
それがどんどん広がって、世界の人も  
心が一つになったらどうなるだろう。  
いつかそんな地球にできたらいいな。

六年二組をこんなクラスにしたい

熊谷 和彦

六年二組の心が一つになって  
低学年などにやさしくし  
いけないことはしっかり注意して  
自分たちも廊下を走ったり遊ばない  
ようにして

六年生の代表になれるようにしていきたい



平岩 直樹

心とは とてもよいものだ  
心というのは  
人それぞれがう  
悪いことを考える人  
いいことを考える人  
ひとには  
いい心をもってほしい

心の海をこえ、岸につくまで

酒本 明子

今の班では、何となくたよりない。  
思っているのは、私だけかもしれない。  
理科の実験で失敗したり、少しのこと  
でもめたり・・・音楽で、できない子  
のことを、あそこがちがうね、ふえがせ  
んせんちがうね、などと言ったり・・・  
心の海をわたろう  
岸につくまでわたろう  
岸につけば、輝く心の宝物が、待って  
いる。

精神が強くなるスポーツ

服部 哲也

午前六時  
外に出たばかりは日の出とともに  
走り出した  
日がだんだんあがってくる  
ほくもだんだんペースをあげる  
つかれてきた  
ほくは思った  
千メートルは長く疲れる競技だ  
だから精神も強くなる  
がんばろう 甘えてられない  
走り終わった時  
千メートルで強くした精神を  
運動だけでなく  
他のことにも  
生かしていこうと思った

音楽

高須 真吾

音楽をきくと気持ちがいい  
音楽をきくと気分が晴れてくる  
音楽ってふしぎだな



子どもたちが作るおもいも祭り

一年生担任

森下 初子  
竹平 真仁

・きょうは、たいいくかんでおいもまつりにいって、たのしかったです。おいもがすごくおいしかったです。  
もう一かい、みんなでやってみたいです。

(にわ あずさ)

さつまいもの収穫も終わったので「たくさん穫れたから、お祭りをしようか。」と子どもたちに呼びかけました。多くの賛  
同を得、十一月十一日(水)一年生だけで「おもいも祭り」をすることになりました。話し合いの結果、お祭りの計画・運営に  
あたる委員を決めました。そして、どんなことがしたいか、学級・委員で話し合いました。話し合いの結果、①おもいもスタンプ  
②ゲーム、③劇、④踊り、⑤作文の五つの活動を行うことに決まりました。そして、それぞれが自分の好きな活動を選んで、  
学級の枠を越えたグループで行うことになりました。

①おもいもスタンプ

二十名の子どもが集まりました。半分に切ったさつまいもに図案を描き、彫刻刀で彫ります。小刀など持ったことのない子  
たちなので心配しましたが、だれもけがをすることなく版ができました。「いもから左手を出さない。」という約束が  
守れたようです。絵の具を塗って、スタンプを押しました。

・スタンプがかりがじょうずでした。おいものかたちじゃないとおもったけど、ほんとうにおいものかたちでした。

(つじもと あやか)



## ② ゲーム

約七十名もの子どもが集まりました。お祭りといえば露店のイメージが強いようで、子どもたちは次々に遊びたいことを考え出しました。その中から、どんぐりのこま、割箸でっぼう、松ぼっくりのけん玉、くじ引き、輪投げの五つを選びました。制作する遊び道具の数と、作り方の簡単な助言だけを聞くと、子どもたちはさっそく作り始めました。試行錯誤を繰り返して、子どもたちの中から、手から手へ、口から口を通じて教え合う光景が見られました。

・あそびコーナーで、くじをひきました。ぼくは、はずれでした。あたりのひともおかつたです。でも、あたりのこはしょうひんがありません。しょうがっこうだからないとおもいました。

(おおた かずひろ)

## ③ 作文

十五名。「大きなさつまいも」という題で、役割を決めました。司会者や、さつまいも役の子もいます。台詞は「大きなかぶ」を参考に子どもたちが即興的に考えました。

・げきをやるまえ、じゅんくんが「いもだ。くってやる。」といいながら(ぼくを)たべるまねをしました。

(下川 ゆうた)

・ぼくは、げきかかりをしました。ちょっとはずかしかったです。

(まつばら じゅん)

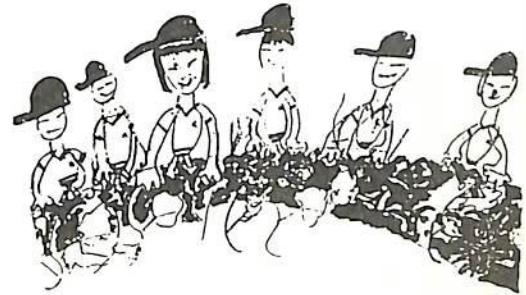
## ④ 踊り

二十名。音楽番組で使われている「どんくん音頭」の替え歌を作りました。名付けて「おいも音頭」子どもたちと教師とでさつまいもができるまでを歌詞にしました。衣装は運動会でも着た手作りのはっぴと鉢巻き。和太鼓も加えて、歌って踊りました。

・おどるときと、おどるまえのときに、しんぞうがどきどきしました。

(つづき なおこ)

・おどりのとき、むねがどきどきしました。わたしは、たいこをやったので、うれしかったです。(すぎうら みどり)



⑤ 作文

十五名。自分の苗が決まったことから始まって水やり、草取り、いも掘り、学年で焼きいもをしたことを作文にしました。各学級の子どもたちに書く事柄を分け、全体として一つの作文になるようにしました。また作文に合った絵をOHPで映しました。また、お祭りを盛り上げるため、おみこしを作ることにしました。ダンボールと竹の棒を基本に、廃物利用のおみこしです。絵を描いたり、色紙や包装紙で飾りをつけたり、各クラス思い思いのおみこしができ上がりました。当日はおみこし係の子が、運動会時の衣装を着て練り歩くことになりました。こ

・ぼくは、おみこしがかりをやったけど、おもくてかたがいたかったです。おみこしがかりをやったらとてもつかれました。  
（おぎそ さとし）

・おどりのとき、いっぱいおみこしをかついだからつかれて、ころぶところでした。  
（うめむら こうへい）

それから、畑を貸して下さいだった成瀬さんと、苗を分けて下さった田中さんに、お礼の手紙を書き、おいも祭りに招待しました。

・なるせさんたちもとってもいいひとです。おてがみをよんだら、きつとなるせさんたちもきつとうれしいとおもいます。なるせさんしかきませんでしたけれど、とってもうれしかったです。  
（川すみ ともよ）



なるせさんありがとう

それまでは、畑のことや苗のことなど考えたこともなかった子がほとんどだったと思いますが、この会を通して感謝の気持ちを持たしたいと思います。そして、子どもたちの最大の楽しみ、会食。学級委員のお母さんたちにお願いで大芋を作っていました。一人五切れと多くはありませんが、自分で作った器にもらい、子どもたちの顔は満足そうです。

・わたしは、おいもをはこびました。いいにおいがしました。  
(林 あいり)

・おいもをたべて、おいしかったです。一ばん大きなおいもがありました。おかわりして、まだたべたかったです。  
(ますだ しょうご)

・つるのおさらのせて、たべました。ごまがかかっています。ごまがおいしかったです。  
(さとう ゆうき)

・おいもをたべたとき、おいしいなおもいました。おかあさん、おいもをつくってくれてありがとう。おいもをたべるときをまっていたよ。  
(山田 しょうご)

おいもづくしの「おいも祭り」でした。一人一役を持ち、それぞれの活動で責任を果たすことで、立派な収穫祭ができました。五月から十月までという長期間のさつまいもの世話がいったからこそ、いろいろな活動をやりたい、という意欲になったのではないかと思います。

## 小さなお店屋さんがいっぱい 〜子ども祭りを通して〜

二年生担任 太田 明美

二学期の生活科は、風で動くおもちゃ作りから始まり、子ども祭りで終わりました。こんな楽しみが宝の山のようにある生活科は、子どもたちの大好きな科目のひとつになってきています。こうして子どもたちの期待のふくらむ中、十一月から子ども祭りの準備は始まりました。

### ①自分たちで頑張って作った計画

まずは、子どもたちの知っているお祭りを聞くことにしました。

「おはあちゃんのところのお祭り」

「上地小学校の夏祭り」

やはり、自分たちの経験したお祭りの話が出てきました。特に、夏祭りの思い出は、話が尽きないほどでした。

「先生、夏祭りにはね。盆踊りがあったんだよ。それとね・・・」

と次から次へと、子どもたちの言葉が飛び出すので、今度は、どんなものがお祭りにはあるのかを聞くことにしました。話し合いの結果、食べ物を売っている・ゲームがある・おみこしがある・そして、いろんなお店がある、など大まかに出てきました。そこで、子どもたちが具体的に考えてくれるように、ゲーム方式で黒板に書かせていきました。班対抗で、時間を決めて、書かせてみたので私の思ったものよりも意外なものまで出てくるほどでした。この黒板に上がったものの中から子どもたちが、作れそうなものを選び、計画を立てることにしました。

出すお店は、ボーリング・ゲートボール・射撃・輪投げの四つ。そして、景品作りを八つの班に分かれて工夫をこらしなが

ら考えることにしました。

一番初めの時、図書室に行つて調べてきました。奈美ちゃんが、『新聞で作ろう』という本を見て、「ぞうさん作ろう。」

といました。六班の人が、笑いました。それから、何週間かたつて、子ども祭りで使うものを作る時が来ました。

(大村 えりな)

### ②工夫を凝らしたお店屋さんたち

お店の材料は、家から持ってきた廃棄物利用です。空き缶やペットボトルや牛乳パック、たくさんものを集めてきました。子どもたちに創作の仕方や手順などを簡単に助言すると、そこは二年生、自ら考えようとする力を見せてくれました。失敗して次のことを覚える、そんな力が少しずつ備わってきたのではないかと思います。班の友達と協力することが楽しいようで、今度の時間も生活科やろうよ、という声も聞こえてきました。何事にも集中しない子どもたちの嬉しい成長です。

ダンボールで作ったおみこしは、折り紙が貼つてあつてきれいでした。

(天野 えつこ)

### ③いよいよ本番、子ども祭り

十一月二十六日 木曜日に体育館で子ども祭りをやりました。

二年生の一・二・三・四組のみんなでやりました。組によって場所が違いました。私のお店は、射撃でした。

(大山 まい)

図画工作で作ったはつびを着て、体育館で一時間目は準備です。射撃の的を並べたり、ボーリングのピンを並べたり少しずつ気持ちを高めていきました。

先生が、僕に「ようかん台を教室から運んできて」といったので、一人で教室に行つてようかん台を体育館まで運ぼうと思ったけど重すぎて倒れてしまいました。

(古瀬 ふみお)

普段見ることでできない子供たちの真剣な顔、いよいよ二時間目のチャイムが鳴り、子ども祭りのスタートです。

私は、初め緊張しました。でも、お客さんは全然来ませんでした。ゲートボールや射撃にはいっぱいお客さんが来ているのにも思いました。それで、私と裕子ちゃんと亜也美ちゃんと一緒に宣伝に行きました。

(栗田 このみ)



楽しかった時間も過ぎ、子どもたちの歓声の響く中、三時間目の終わりのチャイムと共に、子ども祭りは終わりました。教室に帰って来ても興奮の冷めやらない子どもたち、今まで頑張って作った的たちもぼろぼろになってしまいました。帰りには、持って帰りたいとの希望が出たため、得意のジャンケンで分けることにしました。

教室に帰ったら、一年生からお手紙が届いていました。嬉しかったです。記念写真を取りました。でき上がるのが楽しみです。

(池田 ひろき)

先生に手伝ってもらったところも、友達に手伝ってもらったところも、自分でできるようになるといいです。(荒木りえこ)

④手紙で知らせよう

今まで頑張ってきた準備や子ども祭りのことを、お知らせしたい人たちに手紙で書きました。



とちゅうんおげんきですが、わたしはげんきです。あのね、土曜日は、学校の体いくかんで、子どもまつりをしたんだよ。それでわたしは、てたとおもうこのなかから、えらんね、ホーリング、ゲートボール、わね、わかる。せいかいね、ばんだよ。いし、わね、せんせん

たれも、なか、たけど、とちゅうで、うに、い、ばいきて、ほんど、けいひん、かなく、な、たよ、それ、かり、す、と、と、じ、か、ん、は、す、ぎ、て、お、わ、る、と、ま、が、た、す、け、る、の、が、む、す、か、し、が、た、よ、冬、やす、み、さ、て、ね、ま、つ、て、る、よ、ばい、ばい、ます、だ、み、お

初めは、これでやっていけるのだろうか。と心配でしたが、回数を重ねていくうちに、子供たちの目も態度も変わり始めてきているのがわかりました。楽しいだけではなく、協力してやれば何でもできるということがわかってくれただけでも、大きな進歩だったと思います。子どもたちの生活科に対する意欲をなくさないように、私も指導していききたいと思います。



## オズの魔法づかい

行事を通して伸びる子どもたち

三年生担任 杉本 峰

わんぱく盛りの三年生。一年の育児休暇を終え、二学期から一緒に生活を始めた三年三組の子どもたち。じっとしているのが苦痛な程、元気がいいです。その元気の良さに押され、休みボケを味わう暇もなく、二学期が過ぎたような感じですよ。

三学期は、スタートから学芸会一色です。三年生は学年合同で音楽劇『オズの魔法使い』にしようかと二学期に決定していました。わがクラスでは、阿部さん、内畑さん、川越さん、川村さん、藤本さんの五人が歌の伴奏をするようになりました。五人の子たちは、他の子より一足早く、冬休み中から家で練習してききました。そのおかげで、全体の練習では、初回から伴奏付きで行うことができました。

歌の練習のために用意したカセットテープは、学級の練習で、一、二回使用しただけですみました。

子どもたちに『オズの魔法使い』のビデオを参考に見せました。

「本当に、それにするの。いやだなあ。」

などと、口にする子もいました。でも、台本を手にし、練習が進んでくると、そんな気持ちは、どこかへいってしまったようです。

学芸会の舞台で、どの子も目立ってほしい、輝いてほしい。自信をつけて、次の何かに向かっていくステップにしてほしいと考えています。

一六一人の三年生の中で、ドロシー、ライオンなど一人と言うセリフのある子は十数人です。



学級でのオーディションで四人ずつ選出し、二回のオーディションを経て、それぞれの役に決まりました。どの子のやる気も認めながら、充分な場が与えてやれないもどかしさを感じます。自分の思いどおりにならないことの方が多い子どもたちに、前向きに取り組むことの大切さ学ばせたいと思いました。

「みんな、どんどん挑戦してごらん。最初に立候補した子にすんなり決まるのはさみしいな。」と、四人の枠をオーバーするように問いかけてました。

これまで五年生が演じた『龍の子太郎』や『ソメコと鬼』など、観るたびにシュプレヒコールの迫力ある響きに感動しました。しかし、自分の学年で取り組むのは初めての経験です。はじめは、子どもたちと一緒に台本を読み合わせていきながら、「こんなに長いセリフが合わせて言えるようになるだろうか。全部覚えらるだろうか。」と心配になりました。

一通り読むと一時間かかりました。歌の部分だけの練習もやはり一時間かかりました。練習することが山のようにあります。あせる気持ちぐつとこらえて、一つずつ段階的に進めました。

毎日、練習に新しい内容を加え、子どもたちが新鮮な気持ちで練習できるように心がけました。

練習を開始して一週間たってみると、最初の心配はどこえやら、子どもたちは、すっかり台本を覚えてしまいました。台本が手放せないのは先生だけです。誰かがセリフをとばしたり、前日の指示と食い違いがあったりすると、何人かの子どもがす



ぐ指摘してくれました。

「ここでは布をどう動かすことに決めたかな。」

子どもたちに確認することもありました。演出の効果や、子どもたちの声量などを考え、一つ気になる点があると変更したり、練習し直したりという具合で、指導する側が手探りのような状態でした。それにもかかわらず、子どもたちは、劇の内容をどんどん吸収していきます。

二十分間出さずっぱりというのは、なかなか体力・集中力がいるものです。練習が進むにつれて、「一人ぐらいさぼっていたってわからない。」などと考える子がいれば、すぐに全体の雰囲気がかわれてしまうということも、子どもたちなりにわかってきたようです。

もともとが、じっとしてられない三年生です。場面に合わせて布を操作するだけでなく、手にした布を必要以上にさわらないで我慢するのも大きな課題です。

「さあ、一回通すから用意して。」

「そこ、まだスカーフが首についてない。あれ、これから軍手をかける子がいるの、早くして。」

「早くしなさい。ずっと待っている子もいるのに……。」

先生の声ばかりが、うるさいほど飛びかっけてしまいます。一六一人がそろろろということは本当に難しいと感じます。それでも、やればできる。元気が取り柄の三年生ですから。

「げんこつが入るくらいの口を開けてごらん。」

「すごい。いい顔になっているよ。声が出てきたよ。」

みんなが一生懸命になって声を出し、歌い切った時、どの子も満足そうな顔をしていました。

一月二十二日(金)下見の会の日記から

・ ライトがピカッとついて下見の会が始まりました。私はぜんぜんきんちようしませんでした。でも、がんばらなくっちゃと思いました。

最初は、私たちが言う番です。

大きい声を出そうと思って、家で練習した時、お母さんが

「うるさいよ。仁ちゃん。」

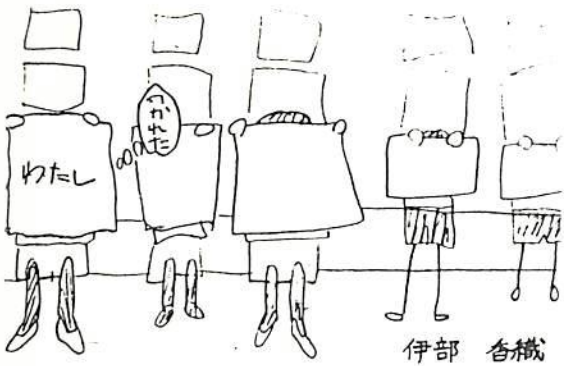
と言いました。いつもこんな声でいっているのに、先生は

「声が小さいよ。」と言うんだろうと思いました。

「ここは、アメリカのカンサス。たつまきの多い所……。」

あつという間に終わってしまいました。見てくれた先生が

はく手してくれて、うれしかったです。(伊与田 仁美)



・ きんちようしすぎて、まちがえてしまいました。

先生たちが、きゅうに真っ暗にしたので見えなくて、たとえばグレーのところ緑の布が出てしまいました。だれかが

「ちがうよ。」

と言ったので、ぼくのことかなあと思いました。だから、真っ暗で見えないと明かりがつくまでごちゃごちゃやっていて、ついでからたしかめていました。五びょうでかえるのは、むずかしかったです。

(山田 敏貴)

・ めのをかえる場面で、真っ暗になった時、よく見えなくてとなりの子がおそく出したので、ぼくと向こう側の子でかくしてあげました。  
(松田 康宣)

・ ぼくは、下見の日いつも通り大きな声を出して力いっぱい歌いました。のどがからからになるくらい歌いつくしました  
(渡辺 敬士)

・ 「わたしは、おまえにはつをあたえる・・・」の所をちょっとこわく言いました。「ワーハッハッハッ。」の所もこわく言いました。

・ 歌も、ただ歌うんじゃなくて、心をこめて歌いました。「なつかしのカンサス」の歌がとても好きです。自分では、いつもより上手だったと思うし、みんなもがんばったなあと思いました。  
(茅野美沙子)

・ 暗い所で布をめぐったりスカーフを出すのが時間がかかってむずかしいです。好きな歌は『いざとなれば』です。  
(石川 玄修)

・ みんなで歌うところで、きんちようしてあまり歌えませんでした。でも、本番は頑張りたいです。(政岡 理美)

・ 校長先生たちが体育館に入ってきた時、本番みたいにとどききました。  
ぼくは、たつまきの役なので前の方へ出ました。最初から最後まで、くん



手をしているので布をだしたり、めくったりするのがやりにくいです。

(棚林 謙)

・ 緑の布と黄色の布を出すところがが手です。なぜかというところ、ずうっとあげてないといけないからです。  
(畔柳 高明)

・ わたしは、かかしの役です。練習では「目玉」を「めんたま」と何回も言ってみんなに笑われたり、きこりに油をさせと言われた時、すぐくはずかしかつたけど、もうぜんぜんはずかしくなくなりました。  
ライオンにとびつかれた時、本当にびっくりしました。  
学芸会もはく手がたくさんもらえるように、がんばります。

(青山 祐巳)



手をはめて布を操作することは、大人でも大変です。水色を顔の前に出して川の場面を作り、なおかつ流れを出すためにずうっと揺らしています。その上で、セリフがあります。一つ一つの場面を全員で作ります。一人ひとりが「全力で演じたよ。」と気持ちよい顔で終われたら最高だと思います。学芸会という行事を通して、子どもたちは、練習の中から多くのことを学んでくれたものと信じています。



新一年

4年生になるはじまるよ

三年生のみなさん、もうすぐ  
四年生になりますね。四年生  
になると、クラブ活動に参加しま  
す。どのクラブに入るか、いろいろ  
と考えていることでしょう。ぼくは  
せむ、たっきゅうクラブに入ることに  
をすめます。そのわけは、とてもす  
にあせにきるクラブだからです。  
どんなふうにおどろいがか、二

4年生になるはじまるよ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
つ例をあゆましよう。ますみ  
んなどいし、におもしろくで  
きるからです。それと、ほんしん  
けいが必要で、いいスポーツにな  
ると思おうから、せむ、入、てくださ

四年一組 青山宗一郎

4年生になるはじまるよ

三年生のみなさん、もうすぐ四年生  
です。ね、四年生になるとクラブ活動に  
参加します。どのクラブに入るか、いろい  
ろと考えていることでしょう。  
私は園芸クラブに入っています。園芸クラブは  
とても楽しいクラブです。ふせかとうつと  
ます、トマトやナスの野菜のふええと植  
えたり、花の種をまいたりします。  
でも、草取りとか、いろいろ

4年生になるはじまるよ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
大変なこともあるけど、その分  
でさあがるとうれしいです。  
せむ、みなさん園芸クラブに入、て下  
さい。

四年一組 南友希恵

学級というわくをこえ、クラブ活動の中で新しい人間関係を  
作っていく大きな変化の中で新しい人間関係を作っていく大き  
な変化の中で、子どもたちはとてもたくましくなってきました。

授業ではできない経験は、子どもの良さや可能性をたくさん  
引き出してくれます。

教師自身もとても楽しいです。他学年や他学級の子どもの良  
さがわかり、とても参考になります。

私は、杉本、深津両先生と一緒に野外レクを担当しています。  
夏は水球、あとはゲームで子どもたちが考えてきます。教師  
企画の時もあり、十二月には火おこしをやり、その火でパンを  
焼こうと計画しました。でも風が強いのか、力不足なのか、火  
おこしは失敗。マッチの火で焼いたら火が強過ぎたのか、おこ  
げがいっぱいのパンを食べました。理屈めきで楽しんでいるの  
で、四年一組の子に、「授業中の先生の顔と全然違う。」と言  
われてしまいました。

四年生もあと一か月。四年一組では昼放課は男女仲良く遊ん  
でいます。自己主張ばかりしていた子もかなり落ち着いてきま  
した。学習に真剣に取り組んでいる横顔を見ていると「大きく

4年生になるはじまるよ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
三年生のみなさん、もうすぐ四年生  
になりますね。四年生になるとクラブ  
活動に参加します。どのクラブに入るか、い  
ろいろとちんてんしていることでしょう。私、料理  
クラブに入ることになりました。そのわ  
けは、お母さんに立っかうです。どういっふう  
に役に立つのか、二つ例をあゆましよう。まず  
お父さんやお母さんが病気になる、た時か  
ど、おいしいとい、てくれるこのこと、ぼ  
くが

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
すくられたいからです。文に、大人に  
な、た時、おいしい料理が上手にできるか  
らです。

四年一組 野本彩美

なったなあ」「力がついてきたあ。」と思います。かなり難しい本を読んでいる子も増えました。

まだまだたくさん成長したところがあります。ご家庭で、子どもさんがこの一年で成長したところを搜してみてもいいか  
がでしょうか。

もうすぐ五年生、四年一組の子の入りたいクラブベスト3は  
これです。



1. 卓球

2. ソフト

3. バドミントン

1. ホーム

2. 手芸

3. 料理

## 四、学校ニュース